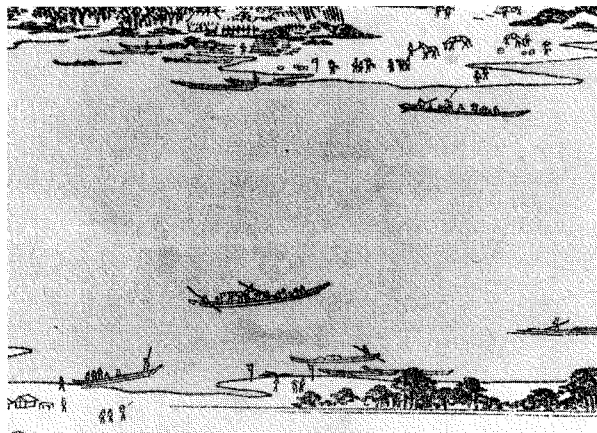


あるむぜお

府中市郷土の森だより

No.35

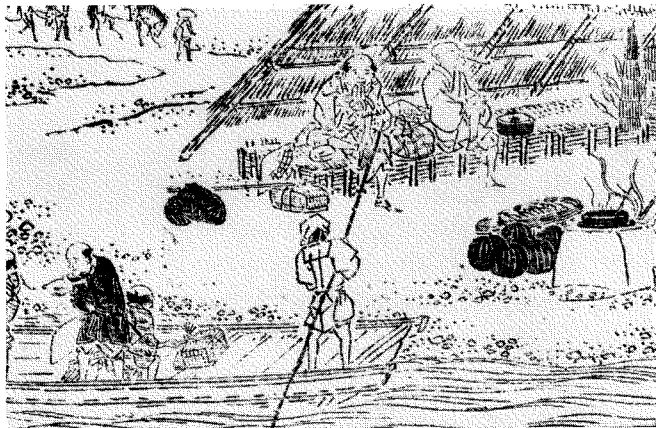
al museo



多摩川の風景3 渡舟場

その昔、多摩川にはどのくらいの橋が架かっていたのかな。と思いながら『調布玉川絵図』（本館蔵）の長い巻物を繰ってみると、七つある橋はみな青梅より上流です。その替わりに大活躍しているのが、長い棹を差して小舟を操る綱笠姿の舟頭さんたち。立川あたりから河口まで、12か所の渡舟場で、合計21人ほどの舟頭さんの姿を見つけることができました。たいがい舟1

艘に舟頭さん1人なのですが、さすがは東海道、六郷の渡しは人馬を乗せた大型の渡舟で賑わっています（右上）。川をずっと遡って、府中は鎌倉街道の関戸の渡し（左上）。もうひとつ、近くの是政の渡しを『武蔵府中国府台勝概一覽』（本館寄託、左下）で見ってみました。もう少し上流の、甲州街道の日野の渡しは望遠レンズで覗き見です（『江戸名所図絵』本館蔵、右下）。茶店の中に旅人を待つ特産の鮎を見つけました。（〇）



おんまやしきの住人

馬場 治子

当館常設展示室には凡そ幕末の頃を想定した府中宿周辺の模型を展示しています。その中、六所宮(大国魂神社)の東方で甲州街道の南側、いわゆるハケに沿った所に「馬医下与一屋敷」と記された一画があります。『新編武蔵風土記稿』の府中本町の条に旧家として採上げられている者の屋敷地ですが、村方に居住する御家人という珍しい例です。

一幕府御家人としての下氏しも

当家が徳川氏に仕える様になったのは、幕末に書かれた由緒書によると、青梅村に居住していた下与市郎なる者が、二代將軍秀忠(一説に家康代)の時に大阪の陣に供をし、馬療治や飼料の御用をした事に始まります。その後彼は府中に屋敷を下され、付属の厩で將軍が使った古馬やこれから仕込む馬、江戸表の病馬等を預かった、とあります。幕臣である下氏が府中に屋敷地を拝領するにあたっては、幕府の御用馬買い上げが毎年なされていた府中馬市との関係が大きいはずですが、それを直接結びつける史料は今のところはありません。

江戸幕府の職制の中で馬の世話に係わるものを『武鑑』から拾うと、將軍用の馬の面倒を見る御召御馬預その他の馬の世話をする御馬預の他、御馬方、御馬医、御馬乗などがあり、いずれも若年寄支配です。これらはいずれも世襲の職で決まった家で受継いでいました。

文化・文政期の『武鑑』には下氏の名は見当りませんが、幕末弘化年間に編纂された『史徴附録』に世襲職をまとめた項目があり、そこに総州小金野の御用牧の馬を掌る野馬奉行綿貫氏等と共に「馬医心懸下与市郎」があります。その記載に依れば、御召御馬預である諏訪部氏の支配を受け、俸禄の高は50俵2人扶持、武州府中在住で、御目見以下であっても世襲職なので家督の代替りの時には江戸城躰躰の間で祿着用の上言い渡される事等が分かり、さらに注として、正徳4年(1714)正月に四谷の御厩が廃された時には病馬を下氏へ差越したと記されています。

先の幕府の職制から見ると馬預と馬医とは区別されているのに、これらの記載では下氏は両方に関わったかに見受けられます。これには多少の事情があった様です。

正徳4年から9年後、享保8年(1723)6月、3代目の当主の時、下氏の御厩も廃止される事になり手元にいた栗毛馬一匹と馬飼4人を諏訪部氏へ渡し、飼料や需要品であった大豆や油も各々担当役に清算を済ませています。厩廃止の原因については定かではありませんが、その前年の享保7年、格式を誇っていた府中馬市での將軍御用の馬買い上げが停止され、府中馬市衰退の発端となっていた事を指摘しておくべきでしょう。

その後宝暦4年(1754)に4代目が家督を継いだ時には「馬医稽古仕候様心掛可申旨」を申し渡される事になります。この申渡は天明5年(1785)の5代目、文政5年(1822)の6代目の家督相続の時も同様になされました。随分回りくどい表現ですがその実態は?

明和4年(1767)に下与市郎は一通の願書を提出します。それは「享保8年以来当家は無役であり、先に「馬医稽古…」を申し渡されはしたがその後も職は申付けられていないので勤役をお願いしたい」という内容です。その状態は以後も変わらなかった様で、天保4年(1833)に到っても「今以て仰せ渡しは無い、かといって無役とはっきり仰せ付けられているのでもない」と記した書付けが見られます。一般の旗本・御家人であれば小普請へ編入という事にもなるのですが、おそらくは歴史的な特殊性が下氏の馬医心掛を世襲の「職」としたのでしょう。

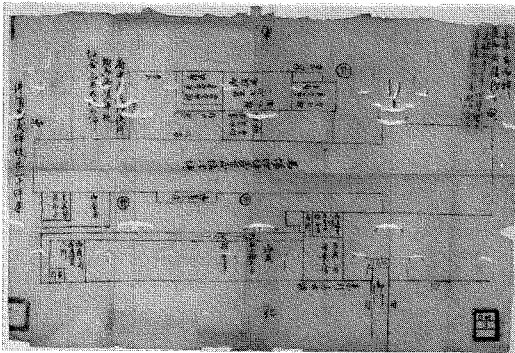
しかしやがて幕末には、洋式軍隊編成を目指した一つである騎兵奉行附属とされ、明治維新に際しては徳川宗家として駿府藩主を命ぜられた田安亀之助(徳川家達)に供して当主は静岡へ移り、府中には隠居が残る事になりました。

一周辺住民と下氏一

さて、この様な御家人下氏の屋敷を地元では

「御馬屋」とか「おんまやしき」と呼んでいました。その正確な位置は、明治初年の地籍図等で確認すると、現在の府中市八幡町1-19、京王線府中競馬場正門前駅の南側、ハケ上から下りきる辺りまでです。この辺は古くは「天地」と称されていました。

屋敷については寛永12年(1635)の書付に「屋敷 1町6畝4歩 御馬屋 与市 屋敷 4反歩 御中間衆 是八年貢地也」と記したものが今のところ最も古い記録と思われまます。その後、拝領屋敷3000余坪(約10,000㎡)と事ある毎に見られます。



写真は元禄5年(1692)に支配方へ提出したと朱書の付箋がある絵図で、厩役所を修復した折のものであります。東西の長い馬場を挟んで馬を飼う部分と役宅(事務所)部分とがあります。この他天明期の史料には55坪余の居宅が御厩から13~14間(約25m)離れた所にあったと書かれています。しかしこのシンプルな造りの御馬屋は、享保8年以降は主役のない舞台となり、府中支配の代官の差配で入札によって取払われた様です。

この屋敷の一番近い隣人達は六所宮神領の農民です。最近ではすっかり様子が分からなくなりましたが、ハケの際というのは湧水の多い所です。御厩屋敷の南側にも3カ所の湧水がありました。もともとハケを下りきった辺は自然地形に任せて境界がはっきりしなかったものか、東側の湧水をめぐって文政7年(1824)に下氏と六所宮は裁判沙汰を起こしています。

発端は神領農民の助次郎が湧水から水路を引いて水車を造ろうとした事です。下氏はここは

屋敷地内だと主張しますし、六所宮側はここは昔から神領の百姓達が飲み水に用いてきたと言います。結果は、屋敷地内ではあるがこれまで通り利用を認める事、もし下家でまた御馬を預かる様な事があってここを馬冷し場を使う時は六所宮側は文句を言わない、ということで決着しました。それでもなお六所宮は、元々3000余坪などと曖昧で境界がはっきりしないのが疑心を生む元なのだ、と言って絵図面を作っておこうという提案をしています。

紛争の記録は他に比べ残り易いので、こういう様子も知れるのですが、当家がいざこざだけで地元とつながっていた訳ではありません。江戸の支配方から下氏に連絡がある時などは、文書が甲州街道の宿々を継送りされて府中宿まで来ると、宿の間屋から下家まで届けられます。時には失敗もあって、江戸からの御用の呼出し状が府中宿まではその日のうちに着いたのに、使いの者が酔払っていたので2日も遅れて御用に差支えたと言宿役人は下家のみならず江戸の御厩役所まで詫言に行った事もありました。

何より、御家人の給料である切米・扶持米も、江戸に住む者達なら幕領の年貢が集積されている浅草御蔵で蔵米から支給されるところを、下氏の場合は、地元の幕府領である府中本町の年貢米のうち地元へ取り置いた分から代官の許可を得て支払われます。その為には本町の村役人とは密接な関係が必要ですので、村役人の交替などの折には下家へも村方から届け出がされましたし、幕末には名主役を勤める有力農民に借金する事態も起きた様です。

下氏と地元との間には婚姻圏なども含めて、もつと種々のつながりがあったと推測されますが、在地居住の御家人という特異な存在の当家の変化は、江戸時代を通じて幕府における府中の位置を考える上で大変示唆に富んでいます。

自然講座 博物館で学ぶ生物学 FINAL

地球上に成り立つ多様な環境条件には、これまた多種多様な生物が、それぞれに適応しながら生活しています。150万種を越える動植物の存在は、長い生物進化の歴史が積み重ねられた結果であり、「博物館で学ぶ生物学」では、これらを分類・探求することこそ、その主軸を成していると説明を続けてきました。また、これを土台として、生物と環境の複雑な関係を考察していくことも重要項目であることを前回お話ししてきましたが、ここにもう一つ、忘れてはならない問題点があります。それは、我々人類も地球生態系を構成するファクターであるということです。

—都市化と生物—

人類も、他の動物とまったく同じような生態的条件を必要とします。耐えうる物理的条件には限界があり、生きていくための最適な水準もあります。また、エネルギーやミネラルを得るための資源も必要です。しかし、人類は自ら大規模に地球の生態系を変化させ、その生産物を人類社会の要求に合うようにする能力を持つという点で、特別な存在になっているのです。

その結果、至る所で都市化という現象が見られるようになりました。人口の増加に伴い、その生活区域が森や林、河川の周辺などに及び、従来の生態系に手を入れざるを得ない状況を作り出しています。そこには幾多の建造物が設置され、生活及び生産の場として機能する、人類のための生活圏が存在します。このため、都市化以前の先住民とも言うべき、他の生物たちへの影響が生じることとなります。

たとえば東京の野鳥では、雑食性の強い種類が、そのまま都市環境に適応していく例がいくつかあげられます。森や林で生息していた種類が、餌である果実や昆虫を失い、生きていくことが不可能となったものの中で、都市にある実に雑多な食物資源でも食べていける種が、市街

地をすみかとして活用しているのです。ハシボトガラス、ハシボソガラスは代表的な種類で、路上に捨てられた残飯、イヌ、ネコの死体、あるいは仲間の死体をも食べる雑食性です。まさに都会で生きていくための条件を備えているものたちと言えるでしょう。また、ヒヨドリやハクセキレイなども、ポップコーン、パンといった人工食物を食べるよう習性が変化してきています。都会を利用して営巣する種類も目立ちます。人家の間隙間を利用するスズメや、人が頻繁に出入りする駅や商店街などの軒下を利用するツバメがそうです。これこそ人の存在を利用して天敵から身を守る、いわゆる「ツバメ型繁殖」とも呼ばれるものです。都会を一つの生態系として関わりを持っているのです。まだまだ都会に生きる生物群の話は尽きないのですが、紙面の関係上またの機会に譲ることにします。

—帰化生物の侵略—

人類が自然に介入したことにより引き起こるもう一つの例を紹介しましょう。それは、交通機関の発達で、人や物資の移動が世界的な規模で行われていることに起因する帰化生物の氾濫です。以前にも本紙で帰化生物についての知見(1989,「都市化と帰化植物」あるむせお№6及び1991,「帰化動物を考える」あるむせお№18)をまとめましたが、セイヨウタンポポのような外来種が容易に渡来し、カントウタンポポのような近縁の在来種を駆逐してしまうケースや、外来種が導入された場合に起こる種間、亜種間の交雑という複雑な問題が生じていることを取り上げました。前者は、都市化が施された場所ほど帰化植物の占有率が高いことでも明らかです。そして後者は、北米原産のカワマスが在来のイワナと交雑しているとか、野性化したアイガモ(マガモの家禽)が在来のカルガモと交雑して「マルガモ」を生み出しているなど、純血種が減少する果てに絶滅に至る危険性を抱えているという意味です。

あるいは、強力な捕食者のいなかった場所にイタチやブラックバスのような肉食動物が移入された場合、食い荒らし現象が生じ、本来生息していた種類を消滅させてしまうこともあります。こうした背景にある人の手の介入は、今後も決して後を絶たないでしょう。

—地球環境と生物—

都市化を筆頭に、人類の文明レベルが高まれば高まるほど、やがて地球規模的な環境劣化が生じます。近年、新聞・ニュース等で話題のオゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨、砂漠化などの諸問題は、元をたどれば、すべて人類が自然に対して行ってきたことへのしつぺ返しのようなでもあります。必要以上の熱帯林伐採や野生動物の密猟・乱獲、車社会の繁栄、工場による大気汚染、海洋汚染など、数え上げればきりがなく、人類は自然生態系にメスを加えすぎたのではないのでしょうか。我々人類も自然界の一構成員なので、その見返りを受ける結果となるのは当然のことです。

このままでは、多種に渡る動植物が絶滅の道を行って行くことは明らかであり、これらを守るための様々な方策が各地で叫ばれているのが

今日の現状です。自然界は一連の鎖でつながっています。危機に瀕した種だけを保護しても意味はなく、生物がバランスよく生きている生態系そのものを守ることが必要不可欠になってきます。つまり、環境の保全から立て直しを計らなければならないのです。

人類は、自然の中に直接生活しているのではなく、道具を始めとする自ら造り出したモノの社会に生活していると言っていいでしょう。そして、その中に野性的な自然が部分的に混在して、人間性の豊かさを支えてきました。野性的な自然を失い、人工的な環境が濃密になった今現在、人間性自体が危険なものになりはしないかという考え方もあるようです。我々がやらなければならないことは、人間に資源を越える価値の認識を迫ること、よって自然の法則性を深くとらえることです。そのためには、自然の歴史的発展の過程において、人類が発生した経緯を考え、同時に野生生物の生活の法則性を理解することが重要です。

これら資源的、教育的、自然史的な価値を得るために必要なものが学校教育であり、そして社会教育における「博物館で学ぶ生物学」なのだと思っています。(N)

☆☆☆☆☆☆ プラネタリウム春番組のご案内 ☆☆☆☆☆☆

全天周映画

『ロスト・アニマルズ』

～太古への旅～

〈投影期間：6月10日(日)まで〉

太古の地球に生息していた恐竜や、絶滅した哺乳類などの姿がCGにより甦ります。

ドームスクリーンを覆う大迫力の映像を、ご家族みなさんでお楽しみください!!



ステラシーカウ



アルバートサウルス

タイムマシン「ブレイン」に乗り込んで、失われた太古の生物たちからのメッセージにあなたの心を開いてみませんか?

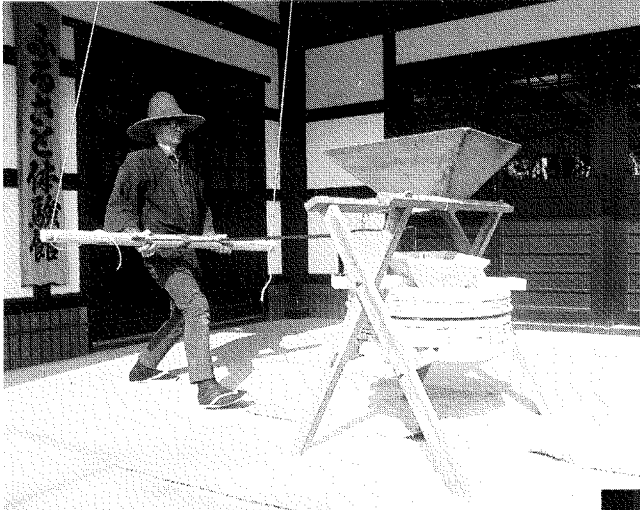
〈観覧料〉 大人500円、子供250円

〈投影時間〉

平日 14:00 15:30

日・祝 11:00 12:30 14:00 15:30

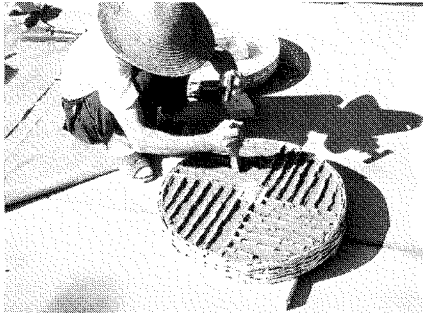
再現、唐臼を使って粃摺り！



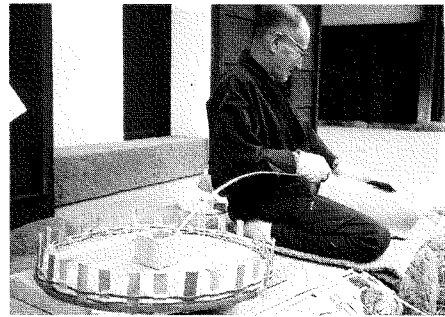
自作の唐臼^{い きょうよう}を意気揚揚と実演する高木錠助さん。



これが本体の材料です。



竹の小片を並べた歯の間に、ヘナ土^{ねんど}(固い粘土)を埋め込んでいきます。



竹を裂いて編みこみながら、枠^{わく}を作ります。

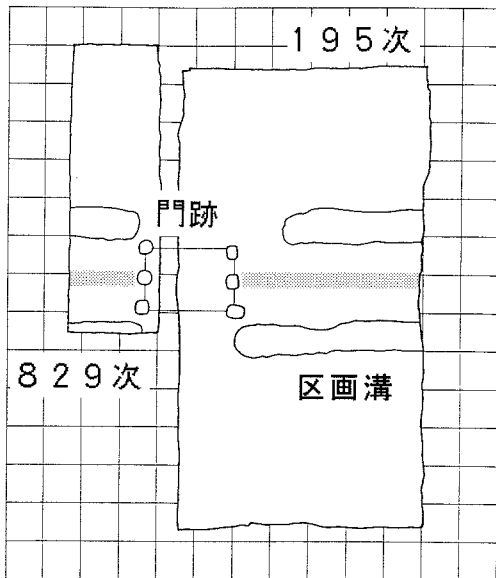
脱穀^{だつこく}した稲^{もみ}の粃^かから、粃^かがらをとり、玄米^{げんまい}にする。この仕事を粃摺り^{かろうす}といいます。昔は唐臼^{い きょうよう}を使いました。博物館の資料にも、いくつか唐臼はあるのですが、なにせ、土で作ってあるのでポロポロで使えません。今までの米作り体験学習「こめっこクラブ」では、近くの農家^{このぼさ}にお願いして、今の機械に頼っていました。それを見かねたのが、ワラ細工^{わらこ}の先生の高木錠助さん。昔、府中の是政^{これまさ}で農業をしていた頃、お父さんが作っていたのを思いだしながら、唐臼を見事に再現して、実演してくれました。この唐臼は、大正の頃から使いはじめた形のもので、鉄の棒や軸の部分は、ふるさと体験館^{かじや}の鍛冶屋^{かじや}さん、相原丈三さんが作ってくれました。(〇)

わー、ほんとお米になって落ちてくる！

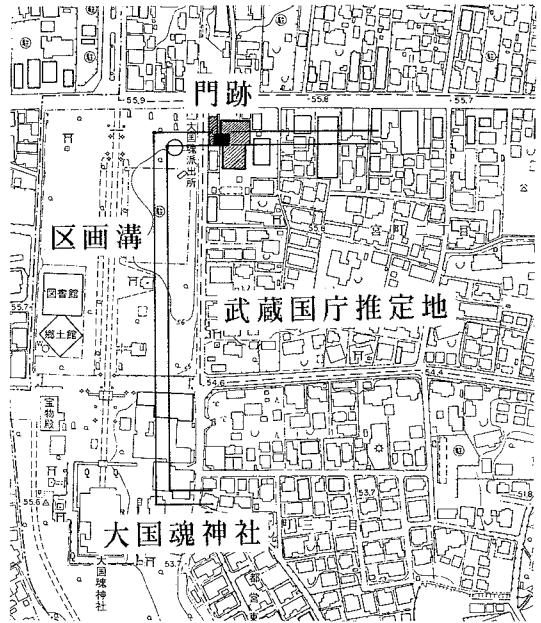


＝最近の発掘調査から＝

府中市に武蔵国の国庁がおかれていたことは、すでにみなさんもお存じのことと思います。その中心施設である国庁の位置については、はつきりしませんでした。しかし、ここ数年の発掘調査の成果により、国庁は大国魂神社の東側一帯（宮町2丁目付近）にあることがほぼ分かってきました。では、なぜここにあったと言えるのでしょうか？ それは、この付近で当時の役所などの建物に関わる柱を据えた大きな穴、礎石という柱の土台になる石を据えた跡や、多くの瓦・塼せんが見つかっていることで周辺の地域とかなり様相が違うからです。さらに、もう一つ大きな理由があります。それは、国庁の回りをめぐっていたと考えられる2本の大溝が見つかることです。この大溝は、部分的にしか見つかりませんが、国庁の西側と南・北側の一部を合わせコの字状にあることがわかってきました。この大溝の規模は、南北で約240mを計り、東西は確認できたところで約140mを計ります。溝の幅は3m弱、深さは深いところで約130cmを計ります。溝と溝の間は溝の中心から中心まで約9mを計ります。おそらく2本



門跡概略図



武蔵国庁推定地位置図

の溝の間には築地塀があったと考えられます。

829次の発掘調査では、この2本の大溝が途切れて、その部分に建物跡の柱列が見つかりました。当調査地区の東側のビルも昭和58年に発掘調査（195次）しており、この時は、溝が途切れていることはわかりましたが、建物跡の柱列までは確認できませんでした。しかし、今回の発掘調査の成果と合わせた結果、溝の途切れかたや建物跡の位置関係から門跡と考えています。門の位置は大溝の北西角から約45mを計り、東西に見つかる溝の中心より西に寄った位置となり、このことから正門といったものでなく脇門になるものと考えられます。この門は、外側の柱穴だけが確認されましたが、柱穴の位置より八脚門になる可能性もあります。どの様な門になるのかは今後の整理や他の発掘調査が進むことで判明することと思われませんが、いずれにしても、この門跡が確認されたことで2本の大溝がますます国庁を囲む溝とする根拠がさらに強まり、この区画溝の中の構造を考える上でも大きなポイントになるものと考えています。

（宮町 モナムール地区の調査から 塚原）

あれこれ

—災害と考古学— 古代びとの祈りの巻

これまで地震、火災、火山災害を取り上げて、発掘によって発見される過去の地震痕跡が将来の予知のデータになること、火災に遇った遺構が当時の生活の様子をリアルに物語ること、火山災害ではその壮絶さと復興に対する人々のたくましさを見えました。この他にも災害といえは水害や旱魃^{かんぱつ}、伝染病などが思い浮かびますが、最後に、古代の人々がどのように災害から逃れようとしたのか、その手立ての一端に触れてみたいと思います。

まずは代表的な事例、平城京や平安京などから出土する「人面墨書土器」を紹介しておきましょう。

これ、人面とはいうものの、ヒゲを生やした恐ろしい面構えをしていて、河や溝から多量に出土することが特徴で、一般に、穢^{けがれ}を流し去るのに用いられたものと見なされています。さしずめ描かれた顔は、穢をも

たらす疫病神や餓鬼といったところです。都からはこの他にも体長15cmほどの馬形の土製品(土馬)や長さ20cm程度の薄板を人間の形に加工し、目・鼻・口を書き込んだ人形など一風変わった遺物が出土していて、水神に捧げられたり、穢を祓^{はら}った際の道具と考えられています。

ただ残念なことに、国府のまち府中では上に挙げたようなまつりの道具は見つかっていません。それではちよつと淋しいので府中でも発見されている例を紹介しましょう。

府中市内からは馬の歯や顎の骨が出土することが多く、その数は50例以上にのぼります。なぜ、歯や顎の部分だけが見つかるのか、エナメル質に覆われた歯が土の中でも腐りにくいのは確かです。しかし同様の事例は全国的に知られていて、馬一頭が納まらない小さな穴から歯や

顎だけが出土することも多く、死んだ馬を埋葬したとは考えにくいのです。府中ではまだ細かな分析が進んでいませんが、このような状態で発見される馬は比較的若いものが多いとも指摘されています。生ける馬を殺し、歯や顎だけを意識的に埋めるまつりが想像されます。

こうしたまつりの対象は、古代の文献から推し量ることができます。『続日本書紀』などには馬や牛を殺して神に捧げる雨乞いのまつりを禁止する記事が載っているのです。禁止されたということは、それが一般に広く行なわれていたことを示しています。したがって、馬の歯や上顎の出土は、雨乞のまつりに際して神に捧げ

られたものである可能性が高いといつてよいでしょう。

科学の発達していない前近代においては、さまざまな災害は神々のなせるわざと意識され、神々の怒りを鎮めたり、荒らぶる神を遠くへ追いやることが迫り来

る災難を防ぐ唯一の方策だったのでしよう。しかしそれにしても、当時

あつては貴重な労働力であり、経済的価値の高い馬を犠牲にしてまで神に求めた祈りの大きさを感じないわけにはいきません。

……もつとも、祈りに対する代償は科学の発達とは関係ないのだと思うことが多いこの頃ですが……。(F)

〈追記〉2月24日付朝刊で、府中での「土馬」発見が報じられました。都と同じようなまつりの存在が想像されます。



馬の歯

あるむせお 第35号

al museo イタリア語
“博物館で” “博物館にて” の意
発行日 1996年3月20日
発行 (財)府中文化振興財団
府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921